平成 26 年度　第１回三重県経営戦略会議概要

１　日　時：平成 26 年５月 20 日（火）13:15～16:00
２　場　所：三重テラス　多目的ホール
３　出席者：加藤委員、白波瀬委員、西村委員、速水委員（座長）、
　　宮﨑委員、鈴木知事
４　議　題：（１）若者の流出防止策
　　（２）第３回みえ県民意識調査結果から見えてくるもの

はじめに

鈴木知事：

・今年度、第１回の経営戦略会議に参加いただき感謝申し上げる。本会議は私が知事に就任してから、平成 23 年度、24 年度、25 年度、26 年度と開催させていただいているが、委員メンバーはほぼ固定しているので、委員同士の個性も見えてきて、回を重ねるにつれ、より議論がかみ合ってきているように感じる。今年度も引き続き大所高所から様々な意見をお願いできればと思う。
・今日は、人口減少の中の社会減の部分について、議論をさせていただこうと考えている。これは、白波瀬委員も「『選択する未来』委員会」の委員として活動され、2050 年までに１億人規模の安定的な人口構造を目指すという提言もされており、社会減について警鐘を鳴らしていただいている。今日は、そのように自治体にとって危機感のある分野について議論をしたい。
・人口減のうち自然減の部分については、今年度から特に少子化対策に力を入れて取り組んでいく。一方、社会減、特に、「学ぶ場」、「働く場」、「暮らす場」、このような場としての三重県の魅力をどのように評価していくか、ということについては、これまで系統だった議論をしてきていない。
・今日はこのような部分を議論することによって、より三重県に人を呼び込んでいく、あるいは人口減少のスピードを緩める、人口を増やしていくためにはどうしたら良いかということ等、全国中の自治体が悩んでいるテーマについて議論したいと思う。今回は残念ながら欠席だが、白波瀬委員と同じく、「『選択する未来』委員会」の委員である増田委員からも、大所高所から意見もいただいている。経営戦略会議の委員お二人がそうした委員会に入っていることは大変力強い。
・三重県のＰＲをさせていただく。今日は三重テラスで初めて会議を行うが、この日曜日時点でオープン後８か月弱となる中、約 37 万人の方に来場していただいている。大半の自治体アンテナショップの来場者が年間 20 万人以下である中で、三重テラスは大変好評である。今後も様々な意見を取り入れて、より良い場所にしていければと思う。

・次に、速水委員にも大変尽力いただいて、ほぼ 99%三重県内でロケをした映画『WOOD　JOB！（ウッジョブ！）』が５月 10 日に公開され、大変好調に推移している。お手元のパンフレットには、ロケ地マップも掲載しているので、未だご覧になられていない方は是非鑑賞していただければと思う。併せて、この７月７日が熊野古道世界遺産登録 10 周年であるので、その関係のパンフレットもお手元に配布させていただいている。「熊野古道・伊勢路」というところは、熊野川や七里御浜というかたちで、道だけでなく川や浜も世界遺産になっている大変珍しい場所。これからもしっかりＰＲしていきたい。
・また、速水委員にも大変お世話になった「ＭｉｅＭｕ（みえむ)」という新しい総合博物館が、この４月にオープンした。公立では全国で８年振りぐらいの開館になる。開館から１か月で８万２千人の方に来場いただき、順調なスタートを切った。

（委員互選により、速水委員が座長に決定。）

速水委員（座長）:
・今年度も続いて座長をさせていただくことになった。今日は報告事項が１項目、議題が２項目ある。議題の１つは「若者の流出防止策」ということで、冒頭知事のあいさつにあったように、日本の社会的な問題も含めて議論が詰められればと思う。また、例年行っている「第３回みえ県民意識調査」がまとまってきたので、それについても議題２として議論を行いたい。

議題１　若者の流出防止策

速水委員（座長）:
・前回は「極点社会」というテーマを増田委員からいただいて、白熱した議論になったが、今回もそれにつながるような議題となっている。この５月８日に日本創成会議・人口減少問題検討分科会から発表された内容については、事前に増田委員からこの三重県経営戦略会議で紹介があった。白波瀬委員もその分科会のメンバーとなっておられ、委員からは、かなり専門的な意見を聞けるのではないかと考えている。

宮﨑委員:
・前回の議題となった「極点社会」の議論には、私も非常にショックを受けた。出生率だけでは全く語ることができていないものがあるということも良く分かった。あの後、多くの市町村が消滅するというのが実名で具体的に発表され、新聞の一面に載るなど話題となった。この会議で議論したことが１、２か月してマスコミに大きく出たので、あらためてこの会議は先取りした議論をしているのだなと感じた。

・先日、ＮＨＫの朝のニュースで、「マイルドヤンキー」という聞きなれない言葉が耳に飛び込んできた。それは、地元の半径５ｋｍ以内からは外へ出ず、好きな言葉は「絆」「家族」「友情」、好きなタレントは男性がＥＸＩＬＥ、女性が安室奈美恵、浜崎あゆみといった、地元志向の人々のことだそうだ。昔のヤンキーはバイクやスポーツカーでぶっ飛ばしていたが、この人達はミニバンに乗って家族や友達と外出するのが最大の楽しみになっている。
・若者はすべからく上昇志向、上京志向と思っていたが、意外とそうでもない人がいると知った。これらの層は、これから結構な消費層になると感じて、会社でも研究を始めた。例えば、この人達はスマホを持っているがほとんど使いこなしておらず、主にＬＩＮＥをやっているだけと言う人が多いそうだ。こういう人達は地方に結構いる。
・それと関連して、イオンのモールに集まる人を「イオニスト」と呼ぶそうだ。イオニストは、暇があったらイオンへ行くのが特徴で、これらのほとんどの層はマイルドヤンキーと重なる。博報堂の原田曜平氏が、これを書いた本を出しており、曰く、マイルドヤンキーは昔のヤンキーのように暴力的だとか、スピードを出すとかは全くなくて、心はヤンキーなのだが、過激なことはしないという。男であれば、究極の理想は一戸建てを持つことだそうだ。彼らはだいたい月に 20 万円前後の給料で、今の生活を 100 点満点中の 80 点くらいだと感じている。本人はあと給料が５万円上がること、奥さんはあと家賃が２万円下がること、要するに家族であと７万円あれば 100 点の生活になると考えるそうだ。うちの会社を見てもそういう人達はいっぱいおり、彼らは都会へ行かないという前提で田舎にいる。普通は投資というのは自己変革や上昇のために行うものだが、彼らは現状維持のために投資をする。
・そうした人達を商売で獲得するためにはどうするか。彼らは子ども連れで歩くため、子どもを預けて夫婦二人で水入らずというのは必要ない。だから、子どもが一緒に行くことができたり、友達の家族と一緒に盛り上がれるような居酒屋が絶対に流行るだろう。
・彼らは地元の半径５ｋｍでしか動いていないので、都会でアンケートをしても、そうした人達の声と言うのが上がってこないのではないか。極端な話、周りを見渡してもそうした人達は結構おり、三重県には相当いると感じる。
・また、彼らはとにかく転勤を嫌がるので、空き家をリニューアルして安く提供するとニーズがあるのではないか。

西村委員：
・確かにマイルドヤンキーと呼ばれている人達は多く、成熟時代における中間層となっているのかもしれない。地元に残る彼らの雇用を維持していけば、地域はハッピーであるが、その雇用を支えるのは地域の中小、中堅企業である。雇用を維持できるよう企業戦略をきちんと練れば、三重県という地域は存続できるのかもしれない。

・若者が進学のために県外へ出ていくことは構わないと考えている。何故なら、三重大学でも、世界に通用する教育ができているつもりではあるが、実際はそうではないからだ。社会を引っ張っていくリーダーを作るという高等教育を三重県の大学は提供するが、三重県の学生全員が三重県の大学に行く必要はない。
・私自身も進路として三重大学を検討することなく、県外に出て行った人間だが、南部を含めて三重県では、県外へ進学する志向性は高いと思う。問題は、県外に出た人が戻ってくるかどうかで、私も県外から帰ってきた人間なので気持ちは良く分かるのだが、結局は県内に働く場があるかどうかということだ。収入ではなくて、自分が生きがいを感じられる仕事が三重県にあれば、県外の一線級で働いている人も帰ってくる。
・そういう仕組みをいかに作るかということだが、私が行っている活動で、三重県南部の高校生に対し、県内にどんな企業があるのか、社長の声を聞かせるというセミナーがある。県内企業について知らずに県外へ出て行ってしまう学生がいる中で、こうした活動が重要なのではないかと考えている。特に産業に関して、三重県という地域を三重県の子ども達が一番知らないのかもしれない。東京大学を出てバリバリと東京で仕事をしている人でも、30 歳ぐらいになって、自分が勝負する場所は三重県だと戻ってくる人はいると思う。
・もう一つは、マイルドヤンキーもそうだが、高校を出て県内で就職する人間が９割もいるのであれば、彼らをどうにかしなければならない。企業といっても半分ぐらいはサービス業なのかもしれないが、プロフェッショナルや職人という形で地域に残す。職業高校のようなところでは、仕方なく地域に残るような人ではなく、プライドを持って地域に残る人材を育てるようなことをやっても良いと思う。

白波瀬委員：
・日本創成会議の報告書に関して、最も重要なポイントは、各地域の人達が我が身のこととして危機感を共有するということだ。
・議題の「若者の流出防止」については、西村委員が仰ったように、地域から出て行くことを止めるのは難しい。ポイントは、戻ってくるということでも良いが、やはりその地域にどう引きつけるかということだ。内向き志向ではない外からの勧誘というものがあると一番良い。
・そのために、これからの若い家族というものを考えると、やはり働き口のほかに、子育て支援や保教育を充実させること、子育てしやすい地域社会を作るということが大切だ。
・職業高校の話も出たが、専門・専修学校も充実させて、若い人たちが手に職をつけて何らかのプロフェッショナルとなるように支援する。我々が知らないような良い面が地方には埋もれているので、地方から社会を引き上げるような機運が出てくると良いと思う。資料には固有名詞の大学が記載されてい

るが、私は大学が一様にピラミッド型に存在する必要は全くないと思う。考え方自体を大転換したほうが良い。

・若者の上昇志向について話が出たが、「お前達はやる気がないな」と接するより、彼ら自身が幸せだと感じることも「良し」とした方が、若い人たちの可能性を大きくさせていくのではないか。地域でお金も時間もかけて若者たちを地域で育ててくれるということがあれば、地域にとどまってくれるのではないのかと思う。

加藤委員：

・私は香川県高松市の出身だが、そこに住んでいる 30 歳代後半くらいのカップルの典型的な週末の過ごし方は、まさにこのマイルドヤンキーと同じだと感じている。ミニバンに乗って、ショッピングセンターに行って、食事をして、ぶらぶらして帰る。今日、楽しければ良いという生活の仕方自体は悪くないし、そういう人が地元に残れば良いとも思う。ただ、彼らは全国どこでも買えるものでいいのであり、三重県のものを買いに行くというのではない。ヨーロッパの中間層と比べて、のんびりやれば良いということは一見似ているが、ヨーロッパの人々は、人口 500 人の小さな村でも、自分の村が世界一だと言う郷土愛とかプライドがあるが、日本にはそういう感覚がないことが問題だ。

・半径５ｋｍ以内で暮らすことは悪くないが、その根っこには「パブリック」という感覚がないのではないか。地元との結びつきとか絆とかを口では言っていても、結局はお金がそこそこあれば、キャッシュで買えるものを買ってすますというようなところがある。それこそ、『ＷＯＯＤ　ＪＯＢ！』のような体を張った仕事だと根っこができると思うが、無理やり体を使わせるわけにはいかない。西村委員が各地でやっているような取組で根っこを付けてやることができれば、悪くない層になるのではないかと思う。

・マイルドヤンキーのような層は 10 年、15 年経った時に、凄く利己的になるのではないか。全てにおいて要求はするが、世の中に対して何かするということはない。行政からみると、非常に負担になる存在になるのではないか。

・最近の有名な地域活性化の例でいえば、徳島県神山町の事例がある。神山町では 2013 年に、1955 年以来初めて、人口が社会増になった。東京のベンチャー企業などがサテライトオフィスなどを作っており、最初に少し人が来ると後はどんどんとつながっていって、パン屋ができる、イタリア料理屋ができるということになっている。

・神山町では、厚労省のお金を使って職業訓練の塾をやっているが、東京で仕事がなくて来ていたある女性は、東京にいる時は今日の夜は何を食べようか、パスタにしようか何にしようかと考えるが、ここでは家に帰ると近所のおばさんが茄子や白菜をたくさん置いて行ってくれているので、これを使って何を作ろうか考えるため、それだけで非常にクリエイティブになると言ってい

た。そういう意味では、都会でニートのような生活をしている若い人でも、体を使うような場所を求めているのではないかと思っている。

＜事務局より増田委員提出ペーパーの報告＞

鈴木知事：

・議論を聞いていて、今日の議題資料のタイトルについて少しミスをしたかなと感じたのは、流出防止だけに焦点が当たってしまう書き方をしてしまったという点である。白波瀬委員からのご発言、また増田委員からのペーパーに記載してあるような、三重県に来てもらうことも含めてどう惹きつけるかということの議論をしたかった。そういう意味では、資料のスコープの当て方が今一つであったと反省している。

・ご議論いただいた中で、西村委員から「進学で出ていくのはやむを得ない」という話があったが、何かこれだというものが外にあって、それを求めて出ていくというケースは良いと思う。本当は出ていきたくないのに、学ぶ場として三重県内に一定の選択肢がないケース、あるいは魅力がないケースは少しでも避けていく必要がある。いずれにしてもこの問題は、白波瀬委員が仰ったように、どう惹きつけるかということに帰着する。

・宮﨑委員の「マイルドヤンキー」に関連して、私もある本で、若者が聞く曲の中にそうした傾向は表れていると書かれているのを読んだ。例えば、80 年代は「ＢＯφＷＹ」というグループの曲が流行り、それは「尾崎豊」の曲もそうであるが反体制、つまり社会に反抗することで自分のモチベーションを高めようとしていた。90 年代の「Ｂ’ｚ」は、夢を持って頑張るということでモチベーションを高めていくものだった。また 2000 年代の「Ｍｒ．Ｃｈｉｌｄｒｅｎ」は、人との関係性を持つことでモチベーションを高めていくものだった。そのように、若い人たちが何に幸せを感じ、何に対してモチベーションが上がるかということが、それぞれ許容され、肯定される地域であって欲しいと思う。

・フルセットで物事の選択肢を持つということは難しい時代であるため、今の人的、財政的な制限がある中で、三重県の良さを生かして、もう少し若い層を惹きつけていくような魅力を高める「学ぶ場」や「働く場」、「暮らす場」というものが出来ないか。あるいは、三重の良さを生かして、その選択肢を増やし、魅力を高めることができないかということについて、これからこの経営戦略会議や、地元も含めて様々なところで意見交換していきたい。

速水委員（座長）：

・私自身も、若者流出という今回の課題を受けて、難しい問題であると感じている。今までの議論で出たように、どうしても進学の段階で県外へ出てしまう、あるいは就業の段階で三重県にない選択肢があるという事実があるが、

進学で出ていくことについては致しかたない部分があるのではないか。私自身は中学で東京に出て、今は東紀州に戻ってきているが、地元東紀州から進学を捉えると、子ども達の進学に必要な費用は、家計支出の中でかなり大きな部分を占める。そうした中で、県外へ出た子ども達が地元に帰ってこないとなれば、進学のための費用は県外の人のために使ったようなものであり、一方で、地元へ戻ってくると「投資」という位置づけで捉えることができる。県外から戻ってくるか、こないかで、それぐらいの違いがある。

・以前、松阪市に松阪大学があった頃は、東紀州の子ども達がかなり進学していた。松阪であれば大学へ行かせるための費用を抑えることができ、地元の方は喜んで進学させていた。それが現在はなくなってしまったので、東紀州の進学の雰囲気も少し変わったという印象を持っている。そういう意味では、若い人が地元に残ってもらうために、教育機関のカリキュラムの問題や場所の問題等も含めて、少し長い目で教育機関の関係者の方と議論できることが、県にとっては大事である。

・宮﨑委員の「マイルドヤンキー」ではないが、私が林業経営をしている中で、雇用という観点からみると、次の２種類がある。一つは、地元の人で、速水林業は地域の中で安定しているから、選択肢が限られている中で林業をやりたいわけではないが勤めているというケースである。もう一つは、外から人が来るケースで、そういう人は速水林業で絶対働きたいという方がほとんどである。つまり、山で仕事をする理由が全く違う。地元に残りたい人に地元の人は、もともと「マイルドヤンキー」的な思考を持っている人が多い。一方、他所からくる人は、自分の職業の選択や生きがいの選択でかなり考え抜いて来る。この両者を眺めながら、どう若者たちに地域に残る満足感を与えていくのかが非常に大事である。

・一方で、所得としてどれだけ必要かという議論があるが、300 万円半ば、少し頑張れば家が建つというぐらいだと思う。都会とは全く違う貨幣価値があることも念頭に置いて、この辺りの問題は少し冷静に分析していく必要がある。ただ、皆が安定志向であると、林業の例でもあまり面白くなくて、あえて林業を選ぶという人がいると刺激になる。田舎でも多分、両方が要ると思う。

・神山町の話であるが、今はサテライトオフィスが有名になっているが、少し前に、山の中に作品を置いたりするなど、地域での芸術活動という下地があった。それが色んな人をひきつけ、こうしたことを上手く利用した地元の事業者の人がサテライトオフィスに展開している。サテライトオフィスという魅力を出すために、潜在的に地域の持った魅力を付加していったということが大事だと思う。そういう意味で、東紀州全体としても、三重県全体としても、ビジネスとして人を呼ぶ前に街の魅力であるとか、経済的ではない魅力によって地域が特色を持ちながら、きっちり力をつけていくことだ。その次のステップが人口の定着ということだろう。三重県は全体的にそれがないのではないかと感じている。地域自体が自分達の街の魅力を高めていくことを

もう一度冷静に考える必要がある。

・前回の増田委員の「極点社会」の話ではないが、「そういうことを言うから余計におかしくなる」という反応が、地方議会や行政には結構ある。それを冷静に受け止めて、事実は事実として、ではどうするのだという議論をするのではなく、それに立腹してしまうというということが良くある。事実をどのように消化するのか、そこを三重県として市町にもう一度理解していただいて、事実に向かって議論を立ち上げていく必要がある。

意見交換

白波瀬委員：

・人口など具体的な数値の話が出たが、「『選択する未来』委員会」の中間報告においても、人口１億人保持の「１億」という数字を出すことに対し、委員のなかで意見が分かれたということがあった。数字を出すことのメリット、デメリットというものがあるが、ポイントは具体的な数字を出さないと数値目標を設定して動くことが出来ないということだ。ただ、どういう出し方をしても様々な数字の読み取り方が出来るという難しさがあり、全体規模の１億人という数字を出すことへの議論もあった。数字の意味と言うものを上手く捉えないと、県民に示す際に誤解を招くところもあると思う。

加藤委員：

・資料４頁の「都市・地域間格差」のところで、「三重県の現状を改善しても、首都圏、名古屋圏との格差が縮まらなければ改善しない」とあるが、きつい言い方をすればここは削除すべきだと思う。首都圏や名古屋圏との格差は縮まるわけがなく、これが縮まらなければ改善しないというのはギブアップだ。格差とは何か、格差の中身とは何かということを考えないと思考停止になってしまう。ここは大事なところで、「格差」ではなく、「違い」だ。

・先程、神山町の話を何故したかというと、神山町の人はもともと「我々の売りはこれだ」ということなどなく、何をやったらいいかというところから始まっている。大南さんという土建業者で家業を継いだ人が、道路ができて町が良くなるかと期待したら、逆に人が減り始めたため、これではいけないということで町の活性化に取り組んだ。先程のアーティストインレジデンスもはじめからアートをやるつもりなど全然なく、何かがきっかけになって人が来るようにしたいと始めたことだ。お金がなかったということが非常に大事で、自分達で何かやって、何かやっていたから次につながって、人が来たことで次につながってという、そのプロセスが大事なのではないか。

・三重県は知事のリーダーシップで既にやっていると思うが、県庁の人はもっと現場へ出て行って、三重県全体でというのではなくて、街ごとに活動を進めるべきだと思う。これは西村委員がまさにやっていることであるが、住ん

でいる人が行政に依存せずに動くという仕組みを作ることが、矛盾するようではあるが、県庁の人達の役割ではないかと思う。

・お金についても、地域振興の補助金があるから使ってもらうというのでは駄目で、地域の人がいろいろとやる中で、ここに 100 万円の予算があれば良いなと思うことにポンと 100 万円を付けるというようなことが重要だと思う。県庁の人は全員が外へ出て行って、そこで良い取組が行われていれば、四の五の言わずにお金を出すというような仕組みを打ち出していけば、それだけで凄い特色になるのではないか。

西村委員：

・私は三重県、特に南部については悲観していない。例えば、過疎化や高齢化は本当にいけないことだろうか。私が田舎を嫌って出てしまったのは、親の世代が「昔は良かった」とか「祭りはこうしなきゃいけない」などと言って、あまり物事が変わらず、時代が変わっていく中で、いつ私達が向上する場があるのだろうと感じたからだ。

・三重県南部では農家や漁師がほとんどいなくなった今、若い人達もあおさを採ったり、カボチャを作ったりして、新しいわけではないが自分達にとってやりやすい農業をやって、稼ぎ始めている。若い人でなくとも、誰も採らなくなった浜で何かを採って大きく稼いでいる人もいて、人がいないことで成り立つ社会も確かにある。

・正解はこれしかない、こうじゃなきゃいけないという固定概念を押し付けるのではなく、次の世代に何とか言って社会で直さなくてはいけない。加藤委員も仰ったように、名古屋圏との格差が縮まらなければいけないというのは、既に１つの固定概念である。

・若い人達に勝手にやらせると、自分達に合ったやり方を見つけてくるのも確かだ。生きることについて、こうやればかっこいいんだよと示す。若者は、生きがいや充実感を感じるといった人間としての喜びに飢えている。ゲームより、自分で切った木を売って、お金を手にした時の喜びのほうが大きければ、そちらに向かうだろう。

・ただし、上の世代が下の世代に対して、これが面白いのだと背中を見せていない可能性がある。サラリーマンが下を向いていて暗くしている姿を見て、下の世代が憧れるとは思えない。憧れるものを見せてやれば、若い子達はそこへ向かって動くかもしれない。そうした背中を見せる人間を作ろうと思っている。

・紀北町の若者が始めた「こだわり市」というイベントを見ていると、彼らは最初イベントとしてやっていたのだが、カボチャを作っている人とパン屋さんがコラボしたら、どれだけ売れるのだろうかとか、今はテストマーケティングの場になっている。彼らは、今度はそれを商品化しようといったようなことを面白がってやっている。今の時代は、昔とは違うやり方に変えてもい

いんだよという形で権限移譲すると、リセットした場所から新しい動きが出てくると思う。それを見せてやれば、これが面白いんだという奴が集まって、勝手にその地域に人が住み着く。
・地域に住む人数について、100 軒あった漁師を 100 軒とも維持することができなかったから減ったのであって、昔以上に人が住むというのは無理だと思う。逆に、許容できる部分があるから、淘汰されて残った人のなかに面白い生き方をする人がいることを示せば、都会から人は戻ってくる。都会にしがみついているよりも、地方で実験的なことをして稼いだほうが面白いという人はいる。それは逃避のためではなく、勝負のために出てくる人達であり、そういう線引きは必要だ。実際、地域に戻ってきた人達は動きが早くて、３年前にやってきてからかなり自由にやっている。半年、１年で人は変わるので、悲観せず地道なゲリラ戦をやっていけば、３年から５年でこの地域は変わってくると思う。

宮﨑委員：
・地元に戻りたいという人達の仕事の受皿を我々中小企業が頑張って担うようなモデルを作らないと、本当は地元に居たいが仕事がないので都会へ出ていかなければならない、という状況になってしまう。
・それを見事に上手くやっている例がユニクロだと思っている。今年から、ユニクロは地元採用で転勤なしの正社員を持っている。どうして正社員で転勤なしにしたかというと、彼らがお客さんを連れてくるからだ。一方で、20 歳代の若い人が上海で店長をやっている例もある。このようにキャリアと地元志向を完全に分けている。三重県でも、このように二つを同時にやっていく必要があるのではないか。
・以前、知事がカリフォルニアに行った時に、ＣＩＡという料理学校に行って非常に面白かったという話をしていたが、相可高校と上手くコラボできないだろうか。相可高校の人が夏休み向こうに行くことができれば、ある意味相当のキャリアになる。今の若い人には、東京大学を出た人とは別のキャリアがある。もし、そういうキャリアを作ることができるのであれば、日本中の若い人が相可高校に来るだろう。そういう新しい世界に羽ばたいていけるようなゲートウェイができれば、単なる大学とは違うキャリア教育ができるのではないか。

鈴木知事：
・最後に宮﨑委員が指摘された、キャリアの複線化ということについては、確かに働く場として少し議論できるのではないかと思う。
・西村委員が言っていただいたことについては、県庁職員の前で、頑張っている一次産業系の若手の姿を見てもらうことを考えている。
・加藤委員からご指摘いただいた議題資料１の４頁の記載表現は、確かに思考

停止の原点にもなりかねない。反省している。
・白波瀬委員からの数字に関することについては、私も国の「少子化危機突破タスクフォース」の委員として少子化目標のことについて議論をしているが、数字のメッセージ性についてはよく議論しないといけない一方、皆がアクションを起こすためにはどうしたら良いかということが一番大事であると考えている。少子化の部分についても、三重県では県民会議などで議論をしていく予定にしているので、数字のメッセージ性をどうアクションにつなげるかということを意識していきたい。

加藤委員：
・先程の神山町の例だけではなく、最近、若者が少しずつ入ってきているという例はいろんな地域で出てきている。なぜ田舎に行くのかは良く分からないが、東京でそれなりの生活はできても、それではつまらなくて生きている実感がない、などの理由があると思う。田舎では、おばさんが野菜をくれるという先程の話のように、キャッシュがあまり必要なく、何となくぼやっと暮らせる。街でぼやっと暮らしていた人間が、それもつまらないから、田舎に行ってぼやっと暮らす。田舎に行って、ぼやっと暮らしている間に野菜が目の前に来たら、この野菜を今日はどうやって料理するかなというように、そこで自分の動きが出始めるのではないか。暮らしていくにはぼやっとしていても暮らせるけれども、ぼやっとしっ放しでは駄目だから何か自分でやる。そうすると、何かやったら面白くなるという、そこのサイクルを１個作るということではないか。言葉で言うのは簡単でも、実際にはなかなか難しいとは思うが。
・田舎で人口が減るのはある意味仕方がない。ただ、社会減の減り方が緩やかになるということが大事だ。ある種の時間稼ぎではあるが、時間稼ぎをしているうちに減少率が緩やかになって、次の展開が出てくるかもしれない。行きあたりばったりのようで、ある種の時間稼ぎというのは大事なのではないか。ある意味では、ヨーロッパの街などは時間稼ぎがずっとつながっているようなものだ。また、出生率というのは意外に変わるものだ。生き方が変われば、出生率も変わる。現に 50 年前と出生率が変わってしまったから、こんなことになっている。

白波瀬委員：
・加藤委員にお伺いしたいのだが、最終的に種を撒くのは自分ということになると思うが、先程仰った「パブリック」というものをどのように構想されているのか。つまり、仕掛けを作ってもやらせるだけでは続かないと思う。成功例が描きにくいのは、個別事例ではなく、つなげてマスとして組み立てなければならないからであり、その時に公の力が何になるとお考えなのか。

加藤委員：

・「パブリック」というのは難しいことでなくて、「きちんと生活する」ということに尽きる。それなりの給料をもらって、人が作ったものを買って生活をしているというだけでは、「きちんと生活をする」ことにはならない。例えば、自分の家の前の道路を掃除するだけでも、皆が掃除するのに自分だけがしていないと、あいつは何だと言われ、恥ずかしいから掃除をする。そして、近所に「おはよう」と声をかける。そういうことが「きちんと生活する」ということだと思う。パブリックなどという言葉は、都会で小賢しく生きている人間が後付けした言葉に過ぎないので、言葉はどうでも良い。皆と一緒のことをやらないと駄目だとか、自分がやっていることを他の人にもやって欲しいとか、人のつながりがどうだとか、「周りと一緒に生きることが、自分が生きることだ」ということを、体のどこかで感じていくことが重要だ。

・「マイルドヤンキー」という言葉で言い表されるような人達は、道路もある、信号もある、水道もある、下水もある、だから自分達は生きていける、という感覚がない。単なる受益者で、サービスを受けているという感覚もない。だから、何かが上手くいかなくなるとクレーマーになる可能性も高い。自分が全体の一部だという感覚を体で持ってもらうということが、単純ではあるが必要だ。

速水委員（座長）：

・私はよく「仕事」と「稼ぎ」と言っている。お金を稼ぐだけの働きは「稼ぎ」で、地域に対して、あるいは未来に対して、社会に対して何らかの役割を果たせる働きというのは、お金をもらえなくても「仕事」であり、私はそういうものをパブリックと理解している。

議題２　第３回みえ県民意識調査結果から見えてくるもの

白波瀬委員：

・女性の働き方について理想と現実が窺えるなど、興味深い結果がたくさん出ている。幸福感について三重県は高いという結果だが、幸福感の研究は国際的になされていることなので、機会があれば、日本全体との比較だけでなく、国際的な比較検討もしながら展開していくと面白いかもしれない。

・女性就労についての考え方で、「中断型」というものを、全く働かないというより、週３日ぐらいで働くような柔軟な働き方の工夫をすれば、より興味深い分析になると思う。ＮＨＫ「クローズアップ現代」で専業主婦の力を生かすという特集をやっていたが、この調査結果をもう少し深堀りすると面白いのではないか。

西村委員：

・最近思うのは、女性を社会のなかで活用することが社会を幸せにするということだ。彼女らは固定概念を変えてくれると考えている。
・三重大学には教員職か事務職しかおらず、それを埋めるように、非常勤職員というのを雇っていて、それが問題となっていたのだが、私はその人達を上手く活用することで、彼らの能力を引き出せると考えている。三重大学地域戦略センターでは、私以外の戦力を全員非常勤にしており、そのなかで一番力を発揮し始めているのは主婦である。今年から研究員という形のスタッフをかなり減らして、その代わりにその人達を支えるスタッフを非常勤職員にした。彼女達で財務管理チーム、企画チームという４人ずつチームを作ったのだが、若い女性１人を除いて皆主婦である。
・彼女らのなかで、私は午前だけ働きますという人が、午後だけ働きますという友達を連れてきてコンビを組んでやっているのだが、全く力は落ちない。そういう働き方はその人達にとっても利点になるし、我々にとっても助かる。「中断型」、「継続型」の中間になるのかもしれないが、一旦働くペースを落とした後、子どもが育ったらフルで働くという働き方によって、女性が社会のバッファーを担ってくれるのではないか。逆に言えば、こういう人を大切にする就職環境を作ることが大切だと思う。たまたま大学はそういう環境にあったのだが、これを企業でもやったらいいなと思っていたときに、先ほど白波瀬委員も触れられた「クローズアップ現代」で特集されており大変良いと感じた。
・三重県は転勤で移ってくる大企業の男性が多く、必ず奥さんも移ってくる。その奥さんのほうがびっくりするぐらい学歴が高い。その人達が子どもを育てているときに、民間企業のなかできちんと回していく。女性が元気なところというのは地域としても元気になっていく。

白波瀬委員：
・西村委員にお願いしたいのだが、非常勤が、常勤より立場が低いという就業の構造になっている中で、非常勤職員にも管理職のような、キャリアアップできる事例をそこから出していただきたい。

西村委員：
・非常勤だが、例えば、『結』という三重大学の産学連携を紹介する雑誌があるのだが、この編集長は非常勤職員の女性だ。ほかにも、ＪＡから予算をとって作っている食育絵本の製作は非常勤のお母さんグループがやっているし、桑名市の総合計画冊子の最終デザインも彼女達が行っている。このように、働き方や大学の役職とは違う側面で、その人達に権限と称号を上手く与えると、やる気になり、お金とか時間ではない生きがいが出来る。そこをうまく生かす場を作ると、自分で頑張ってくれると思う。

宮﨑委員：

・資料で「結婚」と「子どもの数」のところをみると、全国平均が出ていないので正確ではないかもしれないが、三重県は「結婚をするつもりはない」という人が少ないと思う。「いずれ結婚するつもり」という人が多いことは救いがある。東京などでは結婚を諦めた人が結構いるのではないだろうか。

・結婚していない理由で「収入が少ない」というのは割合に低い。都会では「収入が少ない」と「出会う場所がない」というのが結婚できない理由で多いのではないか。ＮＨＫでやっていたが、女性が介護の仕事などで都会へ出てきても、忙しくて若い男性と知り合う機会がなく、収入もかつかつというのをみると、田舎はまだ余裕があるなと思う。

・最近、祭りに若い人が参加しないようだ。桑名の石取祭などは若い人が参加しなくなっている。日当を払ってエキストラを雇い、祭りを行っている例もある。九州では博多どんたくなど、祭りのために生きているような人がいたが、三重県ではそのような人が少ない。ちなみに、マイルドヤンキーはこういうのが大好きで、「ヨサコイソーラン」などはその典型だ。こうした祭りの好きな人がいる一方で、祭りに対してしらけた態度の人が増えているので、この状況を私自身いま分析をしかねている。

・公共交通機関がなく、車でしか都会に出ることができないような団地に住んでいて、歳とともに車の運転がおぼつかなくなると、その家を売って都市部のマンションを買うという人が随分と増えてきている。ただこれは、まだ家を売るだけ余裕のある人で、家も売れなくて、車の運転もおぼつかないという人は凄く不幸で、若い頃に団地を買ったのが失敗だったいう人が増えてくる。一方、もっとお金のある人の中には、家を売り払って名古屋に住むような人もいる。

・これから歳を取った人達が何が大切かというと、生活の足だ。足がないところに住んでいる年寄りは本当に悲惨だ。かといって今から公共交通機関は延びないので、バスを走らせるとか何とかしないとこれから高齢者の満足度は高まらない。

鈴木知事：

・先ほどから議論になっている 10 頁から 11 頁の女性の就労についてであるが、昨年も調査を行っており、国の内閣府の調査と全般な傾向は同じである。しかし「継続型」「中断型」だけは、全国傾向とは全く逆である。全国では継続型の方が多くて中断型の方が少ないが、三重県では継続型より中断型の方が多い。これは昨年もそうであった。そのため、今回、この設問について条件をつけて再質問を行った。白波瀬委員が指摘されたように、この条件をさらに深堀りするということも重要であり、ヒアリングや定性的なことを調べて分析してみたい。また、必ずしもフルタイムでずっと働きつづけたいという人ばかりではないので、柔軟な働き方の研究をこれから行っていきたい。

・全国と傾向が違うもう一つの項目は、幸福感を判断する時に最も優先したのは何かという問いに対して、内閣府の調査では「健康」「収入」の順で回答割合が高かったのに対して、三重県では３年連続で「家族」が最も上位だという回答になっている。こうした、「家族」を幸福感で最も重視するということも三重県の特徴となっている。
・地域活動への参加状況の意欲については、昨年からアンケートを取り始めたが、どんな活動であるにせよ、活動に参加する頻度が高いほど幸福感が高いという調査結果にもなっている。
・白波瀬委員に言っていただいた、海外の研究所との幸福感についての比較については、私が講演する時はそうしたデータなども利用していることもあり、引き続き研究してみたい。

速水委員（座長）:
・地域や社会の状況についての実感についてみると、例えば「身近な自然や環境を守る取組が広がっている」の設問で伊勢志摩地域のランクが下がったりしている。また、若い人たちの部分でそれについて実感している割合が下がっている部分もある。伊勢志摩地域の結果と若い人の結果とは関係はないだろうが、若い人たちが捉える自然環境と年齢を積み重ねてきた人たちが捉える自然環境とは少し変わってきているのではないかと感じている。そういう意味では次の世代を作っていく人たちが見ている自然環境というものが一体どういうものであるかという点については、全体的な県の施策を含めて少し影響してくるのではないかと思う。
・「災害等の危機への備えが進んでいる」との設問については、東紀州地域の方で満足度が高くなってきており、北勢地域の方で下がってきている点については興味深い。東紀州地域は３．１１以降色んな形で動きが出ており、それを目にしているので、実感があるという回答に繋がっているのではないか。一方、北勢地域においては、それほど目にする機会もないため、未だ不安視されていると推察される。災害については浸水地域など、色んな数字が出てきているので、どこが危険なのか、危険に対する対策というのはどういうものがあるのか、あるべき対策ができているのかいないのか、という３つの分析ぐらいは積極的に情報公開していくことが必要である。
・気になるのは、11 番の「文化芸術や地域の歴史等について、学び親しむことができる」という項目である。これも芸術は芸術で良いのであるが、地域の歴史は先ほどのお祭りの話とつながっていて、先ほどの加藤委員のパブリックにも繋がると思うが、お祭りに参加するとか、お祭りの準備をするとかいったことは、田舎で住む以上は非常に大切なことである。それがきちんとできているか、いないかということは、田舎の人間の評価に繋がる。域との関連を持たせるという意味で、地元の若い人たちをお祭りに入れられる仕組みを作っておく必要がある。

意見交換

鈴木知事：

・座長が言っていただいた点でいくつか申し上げると、私は県内の様々な現場に行って「すごいやんかトーク」というものを行っている。私が知事になった平成 23 年度の最初の時は、高等教育機関編というのを行っており、そこで、「三重県の一番好きなところは何ですか」と聞くと、圧倒的に多かったのが「自然」という回答であった。私もアンケート調査の 20 歳代の「自然」のところが減っていることに気がつかなかったが、そういう思いが強いが故に、最近の状況について「いやだ」と思っているのか、どういう理由でこうなっているのかは、すぐに調べられるかどうかわからないが、今回、「みえ森と緑の県民税」を導入することになったので、若い人たちを巻き込んだ自然保全や環境保全の取組のようなものを、もう少し県の事業の中でしっかりとやらないといけないと感じた。

・もう一つの、東紀州の災害意識が高まっているという点については、防災訓練参加率は東紀州地域が圧倒的に高い。逆に北勢地域は低いのが実情である。東紀州地域では、本気度も非常に高い。堤防や道路の整備に加えて、自分がアクションを取ってみたので実感を伴ってきたというのは、非常に大きな要因であると思っている。

・３点目のお祭りについて申し上げると、宮崎県が県内中のお神楽を調べて、207 あることを把握したという。それぞれのお神楽をどう守るかということについては、その地域に任せるのだが、これだけの種類があるということを「見える化」したことに意義があったのではないかと思った。こうした分野では、行政として「見える化」をすることで、その役割を果たしていくことができるのではないかと思っている。

西村委員：

・若い人達は、社会のなかで自分が役割を果たしているとか、役に立っていると認めてもらうと元気になる。昔は、祭りの中で役割を与えられてつながったこともあるのかもしれないが、それが形式だけのつながりになると嫌なのだろうと思う。若い人達に、当事者としての社会での役割を持たせようと考えている。

・三重大学では学生を地域社会に出しているのだが、学生を見ていて、最近もの凄く変わってきたと感じる。というのは、本当に、地域と関わることが好きになってきている。最初は、講義の一環だから行くと思っているようなところがあったが、今は学生が口コミで新入生を呼んで、おじいさん、おばあさんを訪問して「こんなことをやっている」と話をし、自分もやりたいという子が非常に増えているような状態だ。それは、彼らが訪問するだけで老人

が笑顔になり、「また来てね」と言われることに嬉しさを実感しているからだろう。

・地域社会への参加で、学生達が存在意義のようなものを感じている。彼らは中学、高校と勉強して、大学を出たら社会に行くということを全然実感できない。閉じた世界で褒められて育てられてきたので、将来何になったらいいのか、社会との絡み方が分からず不安になっている。社会のなかに入るだけで、この人達はこういうことをすれば喜んでくれるという実感を持つことができるだけで嬉しいと感じている。そのためには、三重県南部の過疎の村に入って、村おこしを地域の老人と一緒になって考える、つまり、当事者にしてあげるのが良いのかなと思う。

・商店街でも同じような動きが起こっている。大門商店街を経営しているときに、学生に何か町おこしをしないかと言ったところ、「私は商店街を歩いているだけでも楽しい。うどん屋のおじさんの話が面白いとか、そういうことを三重大生は誰も知らない。知ったら友達は皆やってくる」と、私の感覚と全然違う回答が返ってきた。彼らは、口コミのように大門商店街のことを三重大生に伝えるパンフレットを作りたいと言い出した。津市に掛け合ったら予算が取れたので、女子学生２人が編集長になって、大門の街を歩いて調べている。彼女達が自発的にスタッフを募ったら 19 人が集まり、自分達が自分達の友達に知らせるためのガイドブックを作っている。勝手に上の世代が思い込んでいる以上に、下の世代は今の時代を良く知っていて、自分達をどう生かしていくかを彼ら自身が感じ始めている。

・県南部で言っているのは、時代が大きく変化しているので、今までのような固定概念に基づいたつなぎ方ではなく、事業継承は一世代飛ばしてはどうかということだ。農業も漁業も次の世代に飛ばす際に、70 歳代から 40 歳代につなごうとしても、40 歳代はやりたがらない。しかし、20 歳代につなぐと彼らにとっては面白い仕事に見える。一世代飛ばしの事業継承を農業、漁業などでやれば良いし、商店街でもそれが当てはまると思った。おじいさん、おばあさんの次の世代の 40 歳代、50 歳代はそんなことやっても駄目だと思うが、損も得もなく稼がなくても良い 20 歳代には、あの場所が面白く見える。だから、ジャンプアップして大きな変化を図るときには、一世代飛ばしの事業継承が若い人達にやる気を起こさせると考えている。

速水委員（座長）:

・一世代飛ばすということに関連して、先ほどの若い人たちの環境に対する意識が変わっていくのと同じように、第１次産業に対する意識はこの 10 年ぐらいの間に社会に登場してきた若者たちとそれ以前の人たちと感覚が違うということを、長年農林水産業に関わってきた経験から感じる。この 10 年間の若い人たちの意識は、随分と変わったという意識がある。これは、たぶん商店街に対する意識も同様であるかもしれない。

宮﨑委員：

・日本酒の世界でいうと、今一番楽しそうにやっているのは30歳代の経営者だ。日本酒の世界は疲弊してきており、杜氏を遠くから雇うことができない状況になっている。そのため、東京農大などを出た若い経営者が自ら杜氏になり、社長兼作り手のような状況になっている。資本家が杜氏を雇ってやっているという世代ではなく、これはこれでまた違う日本酒の展開というものが出てきている。西村さんが仰る「一世代飛ばす」という感覚はよく分かる。

西村委員：

・過去から作っている財産があるが、それをこれまでのやり方でやっても駄目だ。全く同じ財産を違う目で見ると、そのやり方がいきなり適合していく。このように、継続的な継承ではなくて、飛ばしてしまうぐらいの継承をやると、今の時代にあわせて、これまでの財産が上手く活用される気がする。今はその時期であり、そういう人の変化がみられる。

白波瀬委員：

・確かに面白い話なのだが、飛ばされた世代はどうなるのか。

西村委員：

・私も飛ばされた世代になるのだが、最近別の見方をしているのが、捨て駒の美学ということだ。

白波瀬委員：

・でも、長寿化している今、捨てられる世代としては美学だけで生きたくない。

西村委員：

・我々は経験や知恵を持っており、下の世代への支援、環境づくりをやっているつもりだ。20歳代、30歳代の彼らにとっては、何かやろうと思っても、本当に自分達がやっていることは正しいのかと感じており、上の世代から文句が出ても何も言えない。私が南部でやっている仕事は、若者をけしかけて、「君達は凄いよ」と言っているだけなのだが、三重大学の副学長から褒められているというだけで、他所への押さえも利くし、若者も自信を持つ。そういう意味で、我々の世代は１つ上の世代から１つ下の世代へのつなぎ役でも良いと思っている。

白波瀬委員：

・私は、親の背中を見て子は育つと考えている。親がいかに楽しくやっているかを見せることは、子どもにとって決して損ではないと思う。ただし、今ま

でのように頭を叩くような指導は決してやってはいけないということだ。なぜ、一世代飛ばしてという発想が出てくるかというと、長寿化により上の世代がいつまで経っても引退しないために、その次の世代が上からの期待を受けつつ、力を発揮できないまま 40 歳代、50 歳代になってしまっているからだと思う。一世代飛ばしても良いのだが、飛ばされた世代が引退する必要は全くない。

・世代ということに限らず、おじいさん、おばあさんにもずっと不良でいたいという人はたくさんいる。それもＯＫということにしないと、この世代は孫の世話が役割だとかいうことになってしまう。全体的に変えることが一番良いと思う。

西村委員：

・私は、全てに対して一世代飛ばしをしようと言っているのではない。特に過疎化地域には、背中を見ようにも真ん中の世代がいない。しかし、地域に人を戻すというときに、親の世代から子の世代ではなくて、孫の世代まで飛ばしたほうが戻りやすいのではないかという考え方だ。

・商店街も同じで、四日市にあるものづくり系企業のようなしっかりしたところは、代々背中を見せながらやっていけると思うし、二代目の 40 歳代、50 歳代が頑張らなければならない。しかし、40 歳代、50 歳代が抜けた地域もあり、そこにもう一回 40 歳代、50 歳代を戻すのではなくて、20 歳代まで飛ばしたほうが面白いと思う。

鈴木知事：

・今回神宮式年遷宮が完了したが、ある 59 歳の宮大工の棟梁は今回の遷宮が完了したことを機に引退し、20 年後の式年遷宮に向けて、次の棟梁は 39 歳の人にした。本来であれば、その真ん中の 40～50 歳とかでも良いのだろうけど、そのようにしたとのことである。そういう意味で意識的に一世代飛ばすということもある一方、遷宮のような元々のスパンを考えた世代交代というのも大事なのだろう。

・先ほどの自然の話に戻るが、国立青少年教育振興機構による調査で、子どもの時に海や川で貝や魚を獲ったり釣ったりした経験が多いとか、夜空の星をみて楽しいと思った経験の多い子どもほど、最後まで物事をやり遂げたいとか、深く物事を学びたいという意欲が高まるという調査結果が出ている。三重県では男性の育児参加施策として、「みえの育児男子プロジェクト」というのを掲げているが、単に大人の目線で育児についての夫婦間の役割分担をするという視点だけでなく、子どもにどう育って欲しいかという観点で男性がいかに育児参画するかということについて考えるうえで、「自然」ということを大切にしている。

速水委員（座長）：

・今回の「みえ森と緑の県民税」に関連して言うと、森林公園は別にして、日本には人が入りにくい森林が多い。手入れがされていないというだけではなくて、地形的な問題もあるが、元々日本人というのは森林には魑魅魍魎がいるという信仰から、森林が嫌いな人種である。ヨーロッパは一神教であって、森林にはそうした信仰がないので怖くなく、人が入りやすい。そういう意味で、日本も森林に入りやすくして子ども達が遊べる仕組み、県土環境を長期的に考えて整備していただければありがたい。海についてもしかりで、子どもたちが自然に親しむ環境が整えば、他地域と比べて圧倒的なアドバンテージとなるので、家を建てる時に愛知県ではなくて三重県を選択するという人が増え、三重県の満足度も高まるのではないか。このような考え方で県土を作っていくという一本背骨を通した考え方がないと、地域に対する愛着が出てこない。

鈴木知事：

・一昨年の３月まで総務省から出向していた職員は、子どもに自然と触れさせたいという思いから、津市にある職員公舎に住むのではなく、菰野町に住んでいた。先ほどの議題の若者を惹きつけるということにも関係して、そのような軸があるというのは良いと思う。

宮﨑委員：

・資料の８頁をみると一番分かりやすいのは、実感している層の割合が一番高いのは、「三重県の農林水産物を買いたい」で、これはトレーサビリティで安全安心のブランドだということだと思う。その次に割合が高いのは「自分の住んでいる地域に愛着があり今後も住み続けたい」となっている。
・一方、実感している層の割合が低いのは「一人ひとりが尊重され、誰もが社会に参画できている」や「働きたい人が仕事に就き、必要な収入を得ている」となっている。つまり、自然や産物についてはもの凄く誇りを持っているが、人との付き合いや収入については若干不満があるということだ。

西村委員：

・紀北町の 30 歳代ぐらいの若者は、あまりそういうことを思っていない。彼らは、同じ町で活動している人について知らなかったということが結構ある。その理由には、今の時代は縦割りになっていて接点がないということや、祭りがなくなったということもあるのかもしれない。
・彼らが知り合っただけで起こってきたのが「こだわり市」で、自分達がやっていることを発表し合う場として作ったのだが、今は千人ぐらい集まってやっている。ここがテストマーケティングの場になって、彼らは新しい商品を作り始めている。三重県の産品、自然を使いながら自分達の存在場所を見つ

けるということは、やる気になれば三重県の南部でいくらでも出来る。

・この週末に行った地域イノベーション学会でも、70 人ぐらいが聞いている場で発表させている。紀北町での取組を知って対抗し始めたのは、元々やっている多気町や、鳥羽市でも鳥羽マルシェというものを漁連とＪＡが組んで若者がやっている。刺激すると、自分達の財産、自分達が持っているものを良いと思い、彼らは動く。速水座長が仰ったように、成功事例を作って、それが広げていくと、この地域ではこういうことやればうまくいくのか、こんなことやっていいんだということが分かり、地域の住民は勝手にやっていく。知らせることが大事だと思う。

速水委員（座長）：

・東紀州地域をみると、「一人ひとりが尊重され、誰もが社会に参画できている」という項目において、年齢層で案外 20 歳代の満足度が低いなりに高く、50 歳代はそれが低くなっている。

白波瀬委員：

・県外にいる委員として言わせてもらうと、三重県は比較的幸福であって、その理由は家族を挙げる人が多いということだが、決して忘れてはいけないのは、家族がいない人もいるということだ。つまり、そういう人達にとって、生きづらい地域という側面を持っているかもしれないということには留意したほうが良い。

鈴木知事：

・４月 30 日から５月２日までロンドンに行ってきて感じたことは、憲法もなく行き当たりばったりのような感じを持ちつつ、まず否定から入らずに肯定するという寛容の精神と、その根底にあるある誇りや自分達の街に対するプライドを現地の人たちが持っているということである。そうしたことから、私は、「誇りと寛容の国」という風に表現した。このことは、今日の議題１や議題２についても通じることであると思っている。

以上